〔枕草子九〕風は
十七八ばかりにやあらん、ちひさふはあらねど、わざとおとなゝどは見えぬが、すゞしのひとへのいみじうほころびたる、花もかどりぬれなどしたるうすいろのとのゐ物をきて、かみはおばなのやうなるそぎすゑも、たけばかりはきぬのすそにはづれて、はかまのみあざやかにて、そばより見ゆる、

〔枕草子十一〕宮は、内へいらせ給ひぬるもしらず、女房のずさどもは、二條の宮にぞおはしまさんとて、そこにみないきゐて、まてど〳〵見えぬほどに、夜いたふ更ぬ、内にはとのゐものもてきたらんとまつに、きよく見えず、あざやかなるきぬの身にもつかぬをきて、さむきまゝにくみはらだてどかひなし、

〔宇治拾遺物語三〕四月のつごもり比に、雨おどろ〳〵しくふりて、物おそろしげなるに、かゝるおりにゆきたらばこそ、あはれとも思はめと思ひていでぬ、〇中略つぼねにゆきたれば、人いできて、うへになればあんない申さんとて、はしのかたにいれていぬ、みれば物のうしろに火ほのかにともして、とのゐ物とおぼしき衣、ふせごにかけて、たき物をめたる匂ひなべてならず、

〔河社〕とのゐものは、とのゐする人の夜の物なり、その袋といへるは、俗に番袋といへる物なるべし、

〔倭訓栞前編十八登〕とのいもの〇中略　とのい物の袋、源氏に見ゆ、宿直人の名字を裏に書つくるといへり、俗にいふ番袋也、

〔雅言集覽九登〕とのゐものゝふくろ　とのゐ物の袋、〇略註河海抄に、殿上宿直人の名字書たる簡號、日給簡を納る袋歟としるしたまひしは、大なる誤りなるよしは、すでに先達もいへり、前のとのゐものを入るゝ袋なり、

宿直物袋